

# 社会学からみた自殺予防の未来・・・フェイス(顔)を考える視点

懇話会

@南山大学 2018年 1月20日

南山大学 阪本俊生

# プロローグ

- 経済の問題？
- 社会的な絆の問題？
- 個人の意思の問題？
- 複雑な複合的問題？
- フェイスの問題

# 自殺予防対策の諸段階と社会学


- 社会状況の変化

 社会学・・・なぜ希死念慮をいただくのか


- 希死念慮、うつ状態

 カウンセリング、うつ病対策、治療

- 自殺のための手段や情報の探索

 手段や情報を与えない、水際作戦

- 未遂行為

 未遂者に対するケア

- 既遂

 自死遺族に対するケア

# 本日の内容構成

- |   |                        |       |
|---|------------------------|-------|
| 1 | 自殺と社会との関係              | 5～8   |
| 2 | 二つの次元・・・個人の意思と社会       | 9～15  |
| 3 | 社会の次元とは？               | 16～24 |
| 4 | ゴフマンの観点からの自殺論へ         | 25～37 |
| 5 | デュルケムとフェイス             | 38～42 |
| 6 | 19世紀と20世紀・・・社会変化と自殺    | 43～48 |
| 7 | フェイス論からみた19世紀と20世紀の自殺率 | 49～56 |
|   | まとめ・・・今後の日本の自殺予防の課題    | 57～58 |

# 1 自殺と社会との関係

- 《ポイントと流れ》
- 自殺は社会的である
- 自殺率の**恒定性**(不変性)・・・各社会には、それぞれ一定率の自殺がある



- 自殺率は、**社会の変数**



- 社会変化が生じると、自殺率も変化

# 自殺の恒定性・・・社会のあり方が自殺率を決める

- 各社会には、それぞれに一定率の自殺  
その率は社会によって異なり、社会の性格によって多様。
- 自殺率は、社会のあり方に連動
- 通常は一定だが、社会変化が生じると自殺率も変化する。  
不況(好況)は自殺率を高め、戦争は低める  
近代化は、自殺率を上昇させた。
- この率は、個人の意思とは無関係。

# 自殺の恒定性(不変性)・・・人口100万人あたり (『自殺論』より)

# 自殺の恒定性は現代もみられる

- 自殺率・・・社会によって異なる
- 自殺率は、社会によって一定・・・社会の変数

	日本	アメリカ	フランス	ドイツ	イタリア	イギリス
1990	16.4	12.4	20.1	17.5	7.6	8.1
1991	16.1	12.2	20.2	17.5	7.8	7.9
1992	16.9	12.0	20.3	16.7	8.0	8.0
1993	16.6	12.1	21.2	15.6	8.2	7.7
1994	16.9	12.0	20.8	15.6	7.9	7.4
1995	17.2	11.9	20.3	15.8	8.0	7.3

# 自殺率が低いということ

- 自殺率は、社会の平均的不幸を測定できる唯一の指標（デュルケム）
- 自殺率が低い → 平均的不幸が小さい



- 生き心地の良い町  
では・・・、なぜ生き心地の良い町となるのか？  
これについての社会学の一つの見方

# 自殺率を低下させるもの

- デュルケムの一つの答え  
社会的連帯、社会の凝集性・・・絆
- しかし、絆だけでは語れないもの  
絆の質、中身・・・その背後にあるもの
- 『生き心地の良い町』  
単なる絆の問題ではない、ということを示唆  
いわゆる、つながりの強い、近隣よりも自殺率  
の低い海部町

## 2 二つの次元・・・個人の意思と社会

- 自殺は個人の意思による行為・・・だが・・・。
- 自殺をもたらす意思の背後には、個人の意思の届かない部分がある。
- 個人の意思を背後から影響を与え、あるいはもたらし、しかも個人の意思が届かないところ・・・社会の次元
- 個人の意思の次元と社会の次元

# この矛盾をどう考えるか

## → 自殺における二つの次元

### 個人の意思の次元 と 社会の次元

個人の意思の次元…自殺を理解、説明

自殺…個人の意思による、自覚的な行為。

当人と人びとの解釈 → 動機・理由

(遺書、周囲の証言)

※ 生活苦

社会の次元…個人の意識がとどかない。

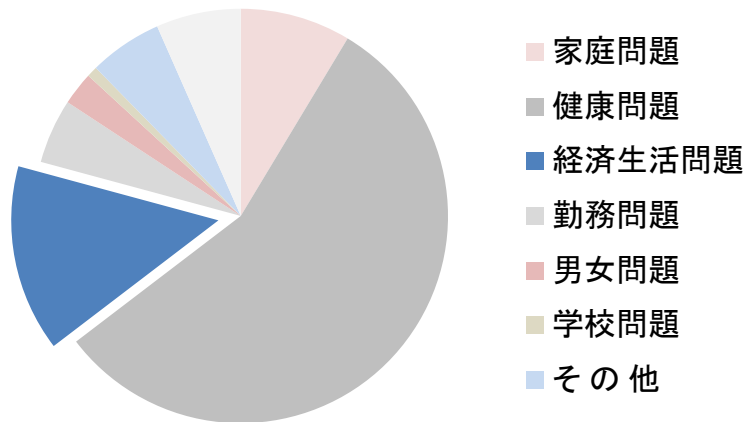
自殺者本人は、自分がなぜ自殺するのか、社会的理由は、自分でもわかってはいない(遺書は役にたたない)

# 1998年の日本の自殺急増前後

- 理由・動機としては、**生活苦が増加**

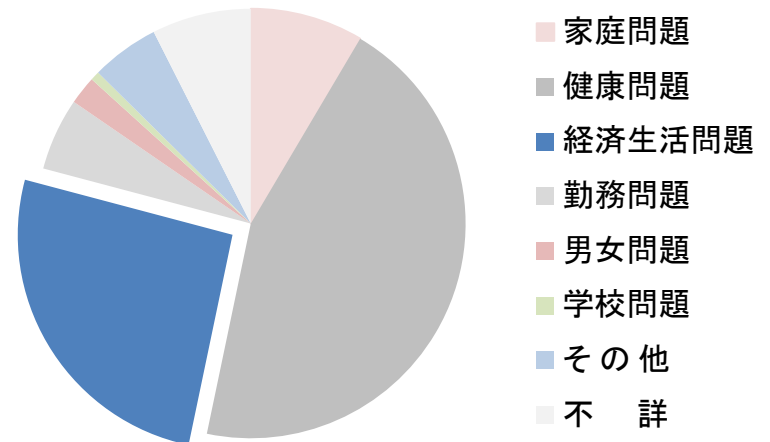
自殺の理由・動機の割合の比較(警察庁『自殺の概要資料より作成』)

平成9年(1997)



経済生活問題...15%

平成15年(2003)



経済生活問題...26%



# 〈参考〉 芥川龍之介の自殺論 (『或旧友へ送る手記』より)

「君は新聞の三面記事などに生活難とか、病苦とか、或は又精神的苦痛とか、いろいろの自殺の動機を発見するであらう。

しかし僕の経験によれば、それは動機の全部ではない。のみならず大抵は**動機に至る道程**を示してゐるだけである。

自殺者は大抵レニエの描いたやうに**何の為に自殺するかを知らない**であらう。それは我々の行為するやうに複雑な動機を含んでゐる。が、少くとも僕の場合は唯**ぼんやりした不安**である。何か僕の将来に対する唯**ぼんやりした不安**である。」

# 媒介要因としての社会

- 表面上は、経済的事情の悪化で自殺が生じたように見える。(=物質的窮乏の問題)
- だが、それとは別に**潜在的な要因**がある。
- この潜在的な要因は、経済環境の変化の影響によってもたらされた、何らかの**社会的変化**。
- 背後にある、社会的変化を明らかにしなければ、問題は解決しない。

経済の変化 → **社会の異変** → 自殺率の上昇



潜在する媒介要因としての社会

# 社会の次元を見るための統計の活用

- デュルケムにおいて意識されないのは、**社会の次元** → 各社会の自殺率の恒定性



自殺率の変化は、社会の次元の反映

- 自殺率の増加・・・この社会の次元による
- 統計を用いれば、社会の問題を探れる

### 3 社会の次元とは？

- デュルケムの社会学・・・規範の学
- 各社会の暗黙の規範と自殺という視点
- 暗黙の社会規範

# 規範の学による自殺分析

- **社会の次元**とは何か

デュルケムの社会学・・・規範の学

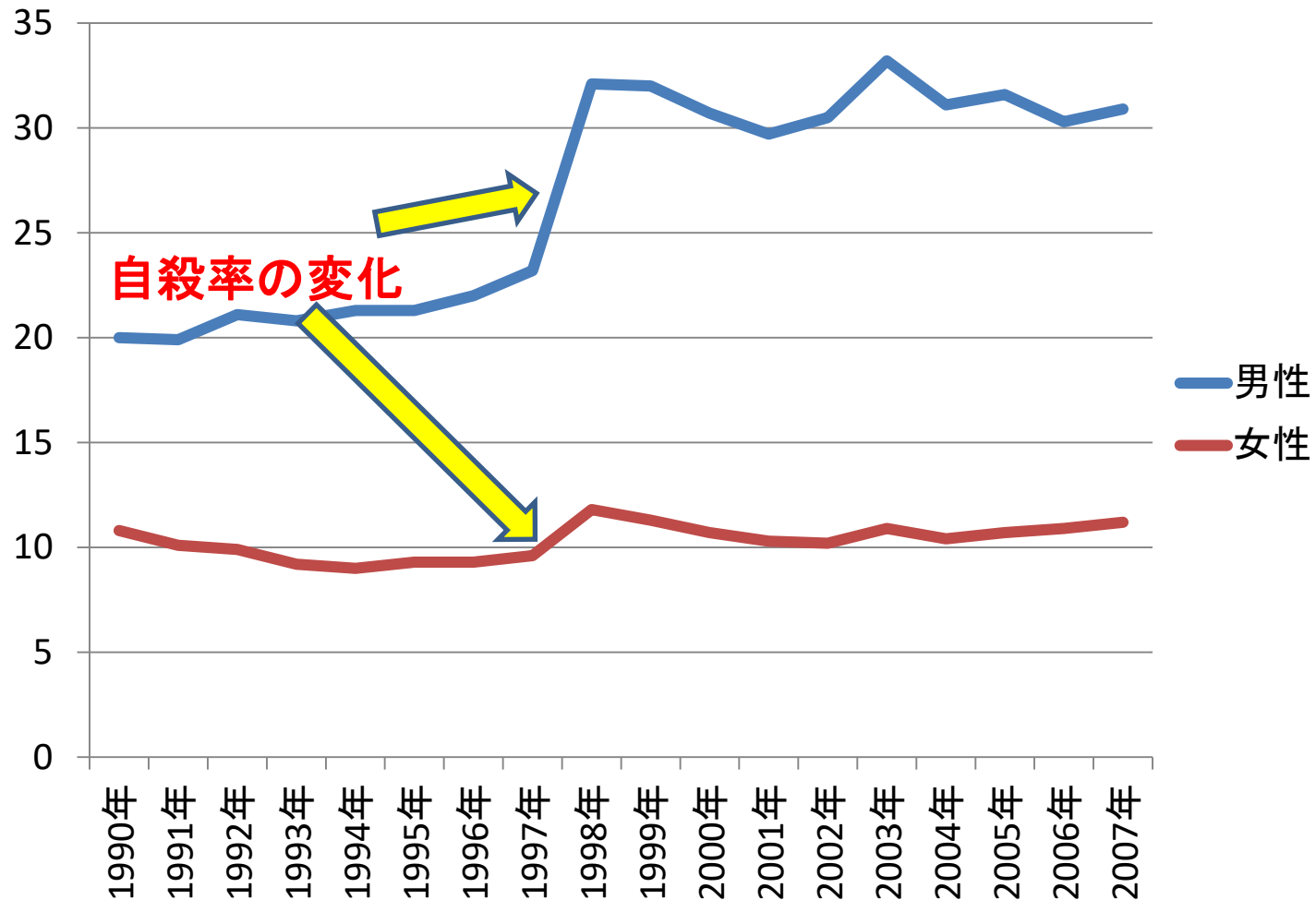
- 社会・・・個人の意思が生じる背景には、そもそもの個人の意思を左右し、その意思や考え方の前提を与えている**暗黙の社会規範**がある。
- 「他者に対する共感や連帯感をわれわれに目ざめさせたのは社会のはたらきにほかならない。人間を意のままに型どり、人間の行為を支配するあの宗教的・政治的・道徳的信念をわれわれのなかに植えつけたのも、社会なのだ。」 (Durkheim:1897)

社会 → **暗黙の規範** → 個人の意思形成<sub>8</sub>

# 暗黙の規範・・・まずは、具体例 男性と女性の異なる規範

- 男性(女性)だから、男(女)らしくふるまう
- 社会学の考え方は、反対
- 男(女)らしくふるまうから、社会的に男性(女性)となる・・・doing gender
  
- しかし、私たちは、通常は逆だと思っている・・・  
暗黙の規範に従っているのだが、意識しない
- この**暗黙の規範**が、**自殺率の男女差**に影響

# 年齢調整自殺死亡率の推移



1997年から、1998年にかけて、日本の自殺率は上昇。  
ただし、上昇率は、男女で大きな違いがある。  
→ 男女で社会規範は異なる

# 男性と労働

- 労働供給は男性と女性とではまったく異なる振る舞いを見せる。
- **女性**の価格変更に対する反応は、経済的合理性のモデルにずっと近い・・・特に、働くことにもはや「経済的」意味が見いだせないとき、労働人口から脱退しがちである。
- これに対し**男性**は、想像に難くない理由から、どんな数字を提示されようとも働きつづける。  
(Heath: 2009)

➡ 男の責任、プライド・・・性に関わる社会規範  
の影響

# デュルケムは、近代家族の 愛情の絆による自殺抑止には否定的

- 「昔は、家族は、単なる相互の愛情の絆によってむすばれた個々人の集まりではなく、むしろ抽象的、非個人的な統一性をそなえた集団そのものであった。…そのすべては失われつつある。」
- 「したがって、われわれの生は、(家族以外の)何かもっと別の存在理由を必要としている。」(Durkheim: 1897)  
(ただし、括弧内は、筆者による補足)

• **伝統的家族** → **近代家族 = 愛情の絆**

↑ 自殺抑止は期待できない

近代家族の感情の絆の自殺抑止効果は強くない  
もっと別の、生の存在理由を与えるものが必要

# 家族集団の流動化

- 前近代の家族・・・制度的関係  
生の存在理由を与えていた  
組織・集団の連帯や凝集性は自殺を抑制、あるいは促進
- 近代の家族や社会関係・・・感情的関係  
生の存在理由としては弱い  
永続性のない、一時的な集まり ※親密性

# 家族だけでなく・・・流動化する組織・集団

## 20世紀の後半

- ポスト・モダン(Lyotard, J.)
- ラディカルな近代(Giddens, A.)
- リスク化 (Beck, U.)
- リキッド・モダニティ (Bauman, Z.)
- 社会関係資本の衰退 (Patnum, R.)

## 4 ゴフマンの観点からの自殺論へ

- ゴフマンの社会学・・・**集団・組織から場面へ**
- ゴフマン・・・デュルケムの継承者
- 場面＝社会の中心的概念・・・フェイス(メンツや体面に近いが、より日常的)
- **20世紀社会の自殺論・・・フェイス・ロスの自殺  
大村英昭の自殺論**

# ゴフマン(Erving Goffman)

(1922-1982)

- ミクロ社会学、ドラマトウルギー(演劇社会学)

『行為と演技』 *The Presentation of Self in  
Everyday Life*(1959)

『スティグマの社会学』 *Stigma*(1963)

『出会い』 *Encounters*(1962)

『相互行為としての儀礼』 *Interaction Ritual*(1967)

# デュルケムの継承者・・・ゴフマン

デュルケムの宗教論 → 現代社会論

「私は、われわれの都会的な世俗的世界における人間が、象徴的行為によって示され、確認されるような一種の神聖さを賦与されていることの意味を、いくつか探ってみたい。」

「私は、デュルケムの社会心理学の近代的な新解釈が可能であることを示してみたいと思う。」

*Interaction Ritual* (『儀礼としての相互作用』)

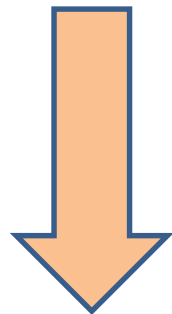
# ゴフマン社会学の特徴

- 統計を用いない・・・観察、質的研究
- ミクロな社会的相互作用の場面の分析
- 自殺は研究していない
- **社会状況、場面の規範分析・・・コミュニケーション論、対人関係論に近いイメージで見られるが、実は社会規範の分析 (デュルケムに通じる)**

# 20世紀後半 ゴフマン社会学が注目された理由の1つ・・・社会のとらえ方

- 個人と社会とのかかわり方の変化
- 19世紀

組織・集団の社会(デュルケム) から



個人化

- 20世紀後半・・・流動的な社会(不安定な組織・集団)

集まり・出合いの社会 (ゴフマン) へ

→ 社会状況・場面へと分解された社会の分析

# デュルケムの規範／ゴフマンの規範

- 社会規範の見方の違い

デュルケム・・・**集団や組織の規範**(道徳規範)



ゴフマン・・・ 個々の**社会状況、場面の規範**  
＝出会いの場面の相互行為秩序をも  
たらず暗黙の規範  
(encounter, gathering )  
(interaction order)

# ゴフマン社会学とフェイス

- ゴフマンの集まり・出会いの社会学の鍵概念の1つ…フェイス(face ÷体面)
- あらゆる社会的場面…個人はフェイスを通じて、参加している。  
個人が社会とかかわれるのは、社会から承認されたフェイスをもっていることによる。
- フェイス…個々人にとって社会の最前線  
状況の社会規範の一部
- スティグマ…フェイス維持が困難になる烙印

# スティグマと幸福感

- 失業者は、彼らの周りに多くの失業者がいて、  
(給付の水準はどうであれ)失業給付への公的  
な支援がある場合には、あまり不幸を感じない。

(Frei, B. 2008)

- ロシアでは、失業者やその日暮らしの労働者  
は、失業率が高い地域(や経済的な変革や改革  
が少ない地域)ではより幸福である。

(Graham, C. 2011)

- つまり、**周りの人びとが、失業をどうみるかで、  
失業も、その意味が変わる。**

# 社会のまなざしの問題

- スイスの州間比較分析で、失業給付を引き上げることに賛成票を投じた州では、失業者はより幸福感を感じている。
- 人々が「それは私の責任ではない」・・・といえること。
- 「烙印(スティグマ)効果は、・・・将来の雇用や所得についての不安よりも、公的なセーフティネットに対する支持がどの程度あるのかということにより深く関係している。」

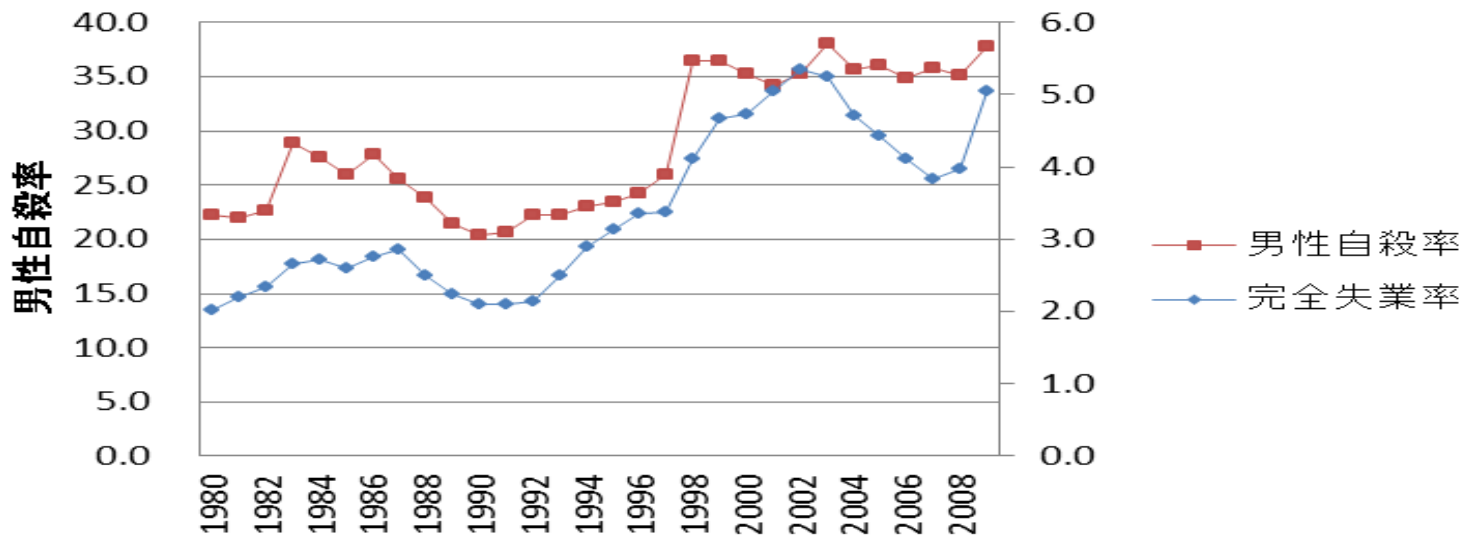
(Frei, B. 2008, Graham, C. 2011)

失業がスティグマ化しない社会

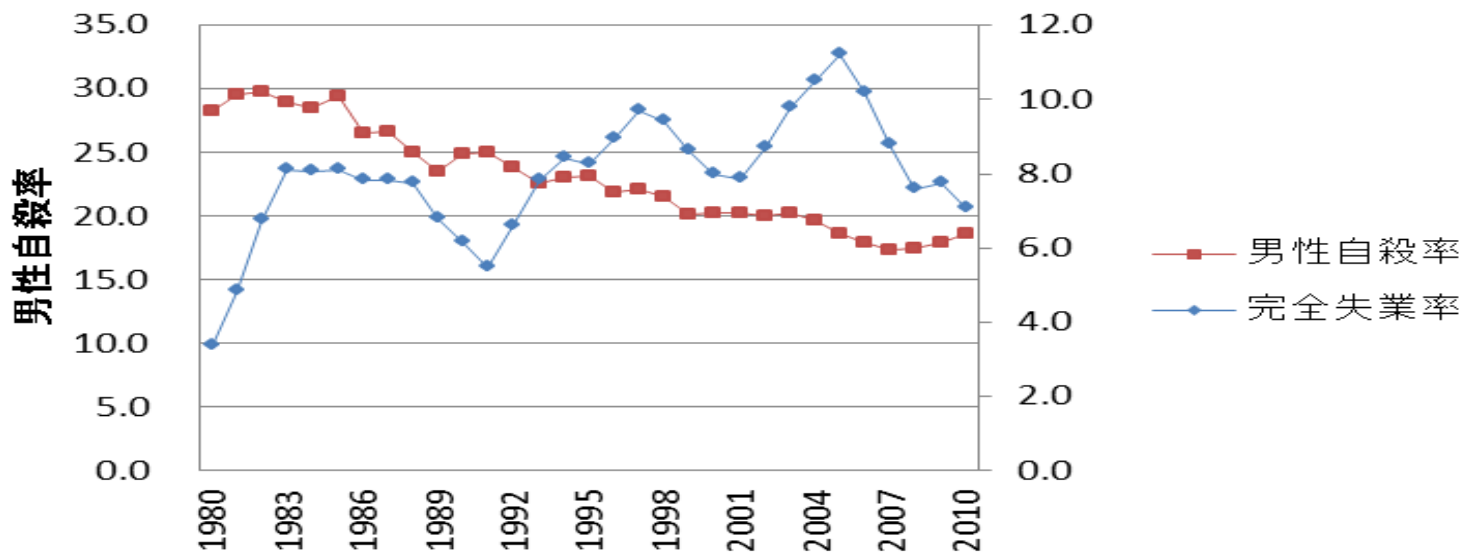
＝失業でフェイスを失わない

まなざしをもたらすのは、各社会の社会状況の規範

## 完全失業率と男性自殺率の年次推移 (日本)



## 完全失業率と男性自殺率の年次推移 (ドイツ)



# 不況とフェイス・ロスの自殺

- 不況において・・・自殺率が高まるのは、貧困層よりもむしろ富裕層。 (Henry & Short : 1954)
- 不況問題が、単に物質的困窮であれば、貧困層のダメージのほうが大きいように思える。
- だが、フェイス・ロスという点では、富裕層のほうが貧困層よりダメージが大きい。

# フェイスと社会保障のあり方

- 「貧しいデンマーク人は、貧しいアメリカ人よりも、・・・公的なセーフティーネットのおかげで、烙印効果(スティグマ)が小さくなるために、より幸福感が高い。」 (Graham, C. :2011)



- 経済的・物質的援助の中身の充実もさることながら、フェイス論の観点からは、実は烙印(スティグマ)効果を下げることが重要。
- 日本の生活保護制度・・・受給者の烙印効果への配慮はどうか？

# 5 デュルケムとフェイス

- デュルケムは、フェイスを論じていない。

フェイス概念・・・デュルケム社会学にはない。

しかし、デュルケムにとっての社会・・・宗教的なもの

社会と自殺の関連・・・デュルケムの、この社会観が背景にある

- ゴフマンはデュルケムの宗教論を通じて、自らのフェイス概念を着想している。

ゴフマンはデュルケム社会学を受け継ぐなかで、フェイス概念を見いだしている。

デュルケムの儀礼論 フェイス論

世俗的な現代社会における宗教的側面＝フェイス



# 個人化した現代社会・・・なぜ、場面のフェイスをみる必要があるのか？

19世紀社会では、集団・組織の統合や連帯をみれば、個々人のフェイスの安定性も見える。・・・直接、フェイスを考慮しなくてもよい  
➡ 集団や組織の統合をみれば足りる  
(デュルケムの『自殺論』)

現代社会では、集団や組織の連帯や統合からは、フェイス状態を測ることはできない・・・**直接、フェイスを考える必要**がある。

# 19世紀と20世紀の社会の違い

## ひと言で言い表せば...

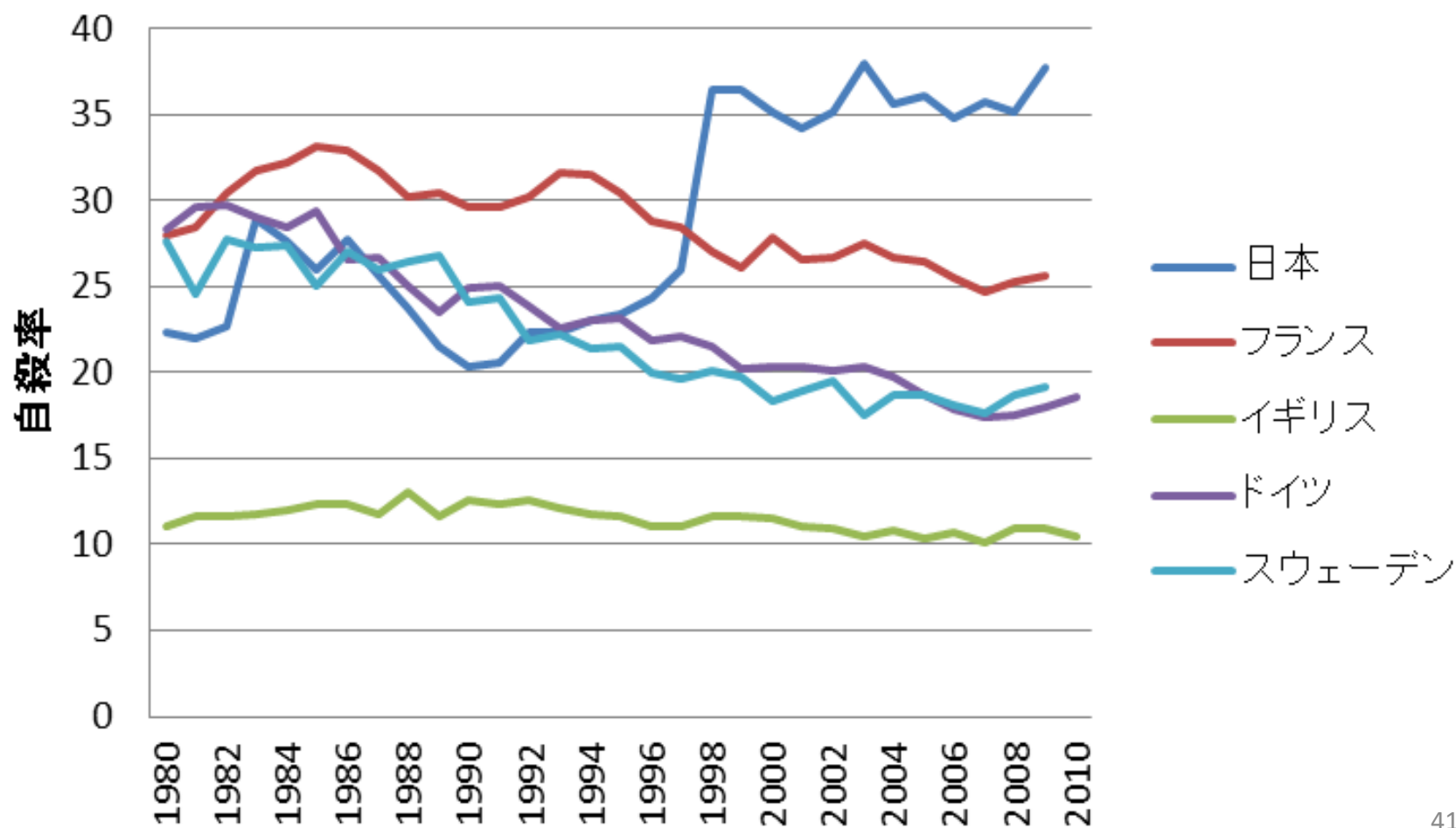
- 19世紀の(社会という)神は、**集団や組織**に宿っている...生かすのも殺すのも**集団や組織**
  - ※ **連帯**による自殺抑止  (集団本位的自殺)
- 20世紀後半では、(社会という)神は**場面**に宿っている。  場面の**フェイス**
- 社会...根底においては、宗教的なもの(デュルケム)  
だからこそ、人の死とかかわる  
なぜ人びとの死の選択が、社会とかかわっているのか?  
...社会それ自体は、宗教的なものだから

## 6 19世紀、20世紀、21世紀 ・・・社会変化と自殺

- 西ヨーロッパの19世紀から、20世紀にかけて、一定の社会変化があった。
- それは、自殺率の変化に表れている。
- 20世紀後半から、21世紀・・・集団・組織が重要な社会から、出会いが重要な社会へ

# 自殺率の国際比較

## 自殺率の年次推移 (男性)



# 自殺と社会関係について

- すでに見たように、デュルケムが社会統合や連帯を重視したのは、この時代の組織・集団が、個々人に一定のフェイスを与えるという前提によるものであった。

集団・組織の統合や連帯は、それらが個々人に与えるフェイスを、(良かれ悪しかれ)安定化させることで自殺を抑止する。

- だとすれば、個人にフェイスを与えない、あるいは失わせる場合、連帯や絆は、かえって逆効果になることもありうる。

自殺予防にとって重要なのは、連帯や絆そのものより、それらを通じて、個々人が自らのフェイスをもち、維持できるようにすること。

# 自殺率は、各グループのフェイスの作りやすさ、維持しやすさの反映

## 《導かれる仮説》

失業 → フェイス・ロス → 自殺

失業してもフェイス・ロスがなければ、自殺の増加は小さい

景気悪化 → フェイス・ロス → 自殺

社会福祉は、経済的困窮とともにフェイス・ロスを緩和するとき自殺抑止効果があがる

閉鎖的社会関係 → フェイス・ロス → 自殺

絆やコミュニケーションが自殺を抑止するとは限らない  
(濃密な社会関係のなかでの自殺、いじめ自殺等)

# 生き心地の良い町のフェイス？

- 岡檀著『生き心地の良い町』に描かれた、生き心地の良い町の印象

近隣の町との違い・・・日本の一般社会との違い？

- フェイスを失わせない社会の仕組み、意識が働いている社会ではないか？

いろんな人がいてもよい 多様性への寛容さ、受け入れ  
人物本位主義・・・形式や肩書き、属性で決めつけない  
病は市に出せ・・・助けてあげます、援助しますとは言わない  
ゆるやかな絆・・・絆を強いることが少ない  
自己効力感が強い

・・・その他、言葉になりにくい、ある種の空気感

他人との〈出会い〉の心地よさの社会

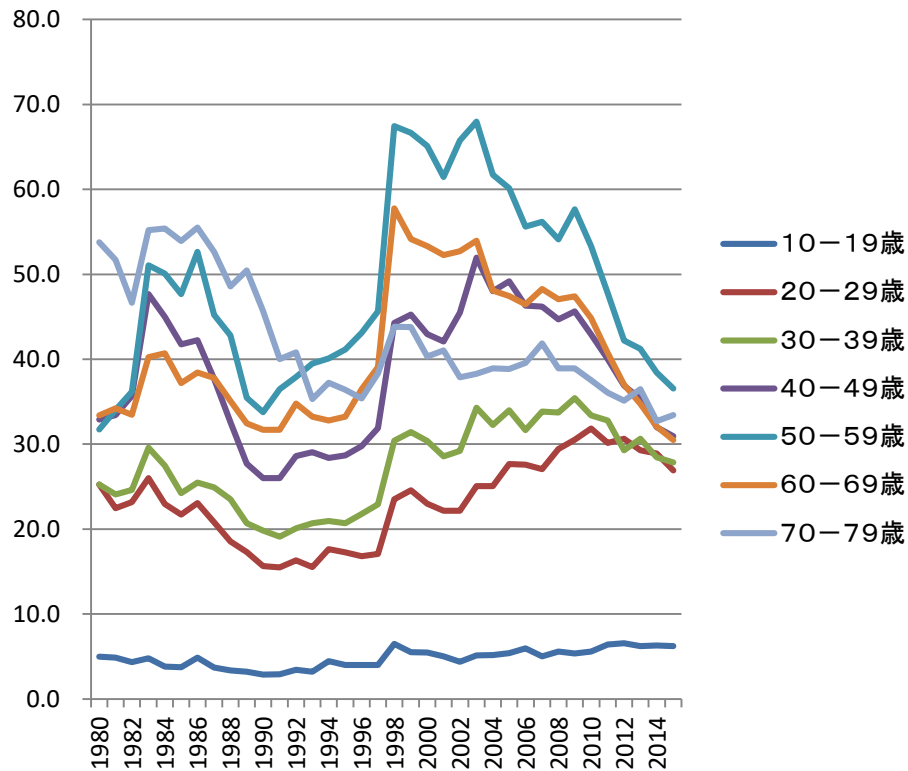
・・・ではないか

↑ 現代の自殺対策の課題

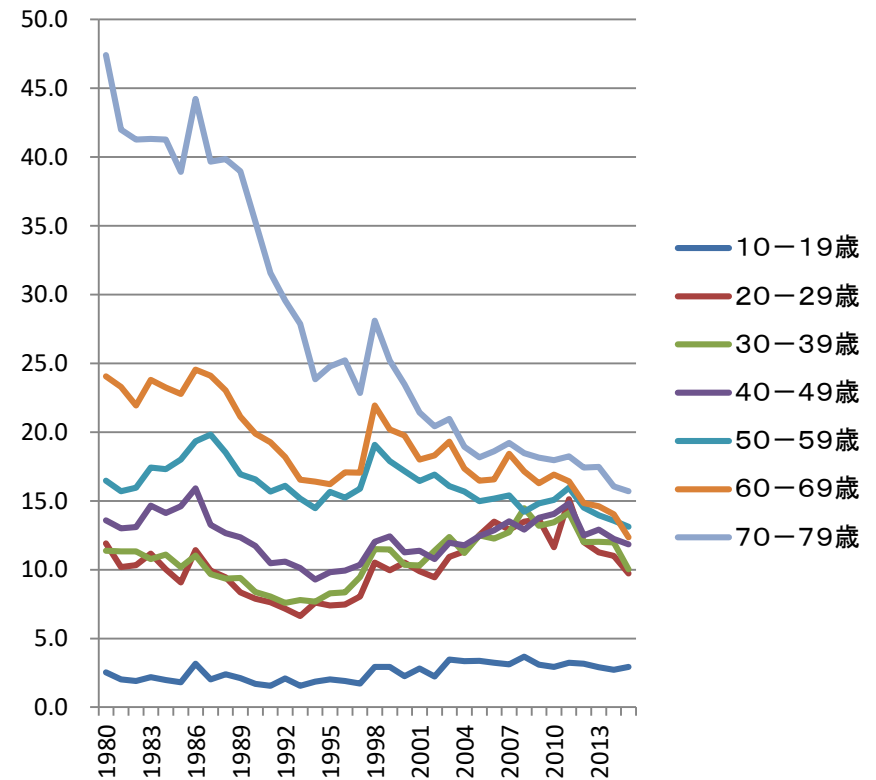
# 自殺率のフラット化

## 10歳階級別、自殺率の推移

### 男性



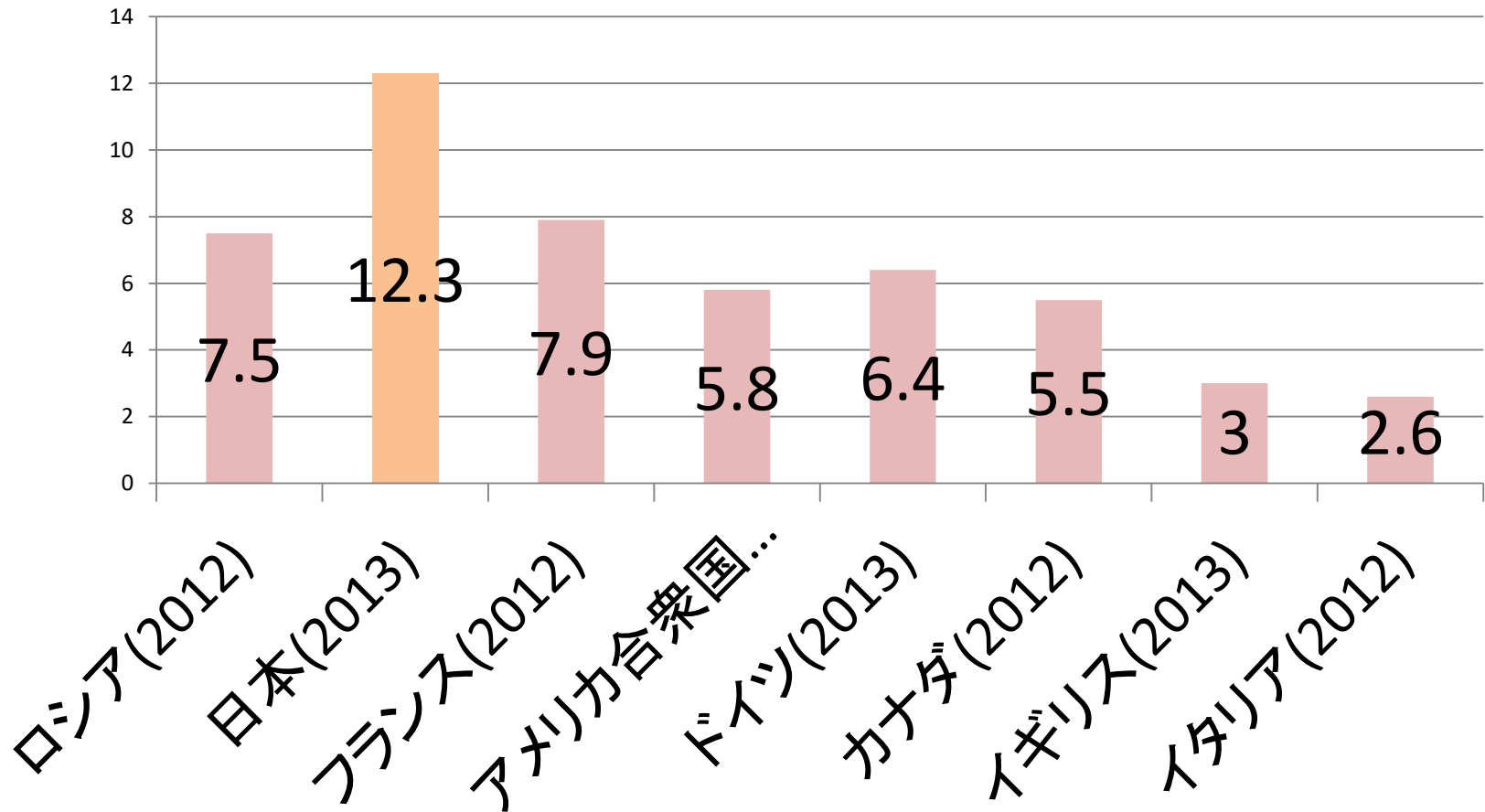
### 女性



いずれも、厚生労働省『人口動態統計』より作成。

# 日本人女性の自殺率の高さ

## 主要国の自殺死亡率 女



資料: 世界保健機関資料「Preventing suicide: A global imperative」などより厚生労働省自殺対策推進室作成

# 年齢、世代と自殺

◇ フェイスを作りづらい、失いやすい世代、性で自殺が増加

不景気 → 中高年男性のフェイロス → 自殺

日本に特有・・・なぜなら日本男性のフェイスは経済力の影響を受けやすい

若年層の雇用、社会関係の不安 → フェイロス → 自殺  
女性のフェイス問題

心のケア + フェイス・ケア

☆ ただし、フェイスの問題は、他人に語ることは難しい・・・  
他人に語ること自体が、自らのフェイスとかがかわるから

# まとめ・・・今後の日本の自殺予防の課題

- 若い世代のフェイス・ケア

多くの若者が自ら納得のいくフェイスをもてる社会へ・・・フェイスリスクの低減(ネットも含め)

- 女性のフェイス・ケア

国際的に見て、日本の女性の自殺率はきわめて高い

- 経済状況に左右されないフェイスの社会へ

経済状況の変化に左右されにくいフェイスの社会へ ※ 日本の男性は影響を受けやすい

# 主な参照文献

- Durkheim, Émile(1897),*Le suicide*, Presses Universitaires de France, 1960, (エミール・デュルケム『自殺論』宮島喬訳、中公文庫、1985年)。
- Goffman, Erving(1963) ,*Stigma*, PrenticeHall, Inc., 1963., (『スティグマの社会学』, 石黒毅訳, 1980年)
- Goffman, Erving(1967), *Interaction Ritual*, Anchor Books (『儀礼としての相互行為』, 広瀬英彦・安江孝司訳, 法政大学出版局, 1986年)
- Baudelot, Christian and Roger Establet (2006), *Suicide: The hidden side of modernity* , Polity Press 2008.(『豊かさのなかの自殺』山下雅之・都村聞人・石井素子訳、藤原書店、2012年)
- Andrew F. Henry, James F. Short (1954), *Suicide and Homicide: some economic, sociological, and psychological aspects of aggression*, Free Press.
- Frei, S. Buruno(2008), *HAPPINESS:A Revolution in Economics*,(『幸福度をはかる経済学』NTT出版、2012年。
- Heath, Joseph(2009), *Filthy Lucre: Economics for people who hate capitalism*, Harper Collins. (『資本主義が嫌いな人のための経済学』栗原百代訳、NTT出版株式会社、2012年。)
- Graham, Carol (2011), *The pursuit of happiness: an economy of well-being*, The Brookings Institution(『幸福の経済学：人びとを豊かにするものは何か』多田洋介訳、日本経済新聞出版社、2013年。)
- 大村英昭、阪本俊生(2018予定)『新・自殺論・・・フェイス・ロスの自殺』(仮題), 青弓社(近刊)